

和田利右衛門の

寄進石造物の追跡

会員 清木 素

徳山藩士・和田利右衛門は、異本天保三壬辰三月改の「御家頼分限帳」によると弓持役で一五石取の下士であった。

和田利右衛門平盛房が寄進した鳥居や灯籠・水船・宝塔等が下松から防府までの各地に残っていることは知られていた。今度山口の八坂神社にも大燈籠が寄進されていたことが分かった。

これらは皆刻んだ文字は深いのは三^{cm}もあり歴然としたものが多く今から三百年四百年は残存するに違いない。灯籠も権現町の熊野神社・下松の浄蓮寺・防府の天満宮・山口の八坂神社のものは、二・八^mにも及び、鳥居になると高いものは三・四^mにも達するものもあり、一五石位の士の身分でよくも、三〇個所にのぼる神社やお寺に、一基だけでもかなりの費用がかかる石造物を郷里の徳山のみならず東は周東町から下松・新南陽・防府・山口へと寄進を続けといった事については一つの物語が伝わっている。

和田家に縁の近い方の談話を「新南陽市の民話と伝説」の中から述べてみよう。

『ある夜、虚無僧姿の旅人が一夜の宿を乞うたために泊めたが、この男が大金を持っているのに目をつけ、利右衛門は男を殺して金を奪い、死体を庭に埋めた。』

以来、利右衛門の屋敷からは真夜中、異様なうめき声が聞こえ、次々とこの家に不幸が続き始めて妻は発狂し「こ



下松市浄蓮寺 燈籠

のうらみははらさずにはおかぬ」「きつと殺してやる」などあらぬことを口走り、ついに狂い死にした。そして子供は疫病で死に、虚無僧を埋めた庭は雨が降っても不思議に土がぬれなかったという。

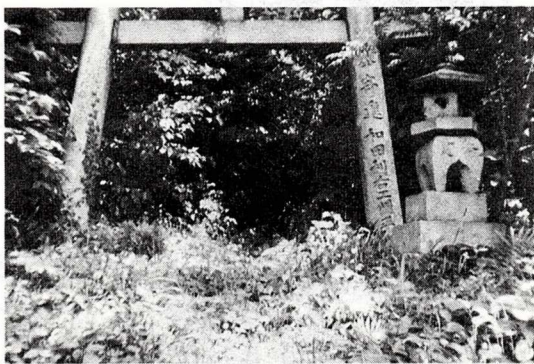
利右衛門は、このうわさが殿様の耳に入り、ついに免職になってしまい、自宅に閉じこもっていたが、良心の痛みで耐えかねて高僧を訪ね自分の罪と苦悩を打ち明けたところ高僧は「私財を投出して神社やお寺に寄進を続けるが良い。そうすればきつと気も晴れて救われるだろう」と教えられ、利右衛門は前非を悔い、次々にお寺やお宮に寄進を続けていったという。』

こうして現在残っているものについて、年代別にみると
 文政(一) 弘化(一) 嘉永(六) 安政(八) 万延(一) 文久(八) 不明(五) となり、地区別では徳山(一九) 下松(四) 新南陽(三) 防府(二) 山口(一) 高森(一) となり、種類別に見ると灯籠(一五) 鳥居(四) 水船(六) 石段(一) 玉垣(一) 宝塔(一) 柱(一) 幟立(一) となっている。今後まだまだ判明するかも知れない。

内容的には鳥居に「神のます鳥居を入ればこの身より、日月の宮と安らかにすむ」と深く刻みこまれているのもある。灯籠に「龍蛇御燭、誠意感道、日月麗天、徳暉照融」

と神徳を称えた銘文が刻まれた珍しいものもある。日限地藏尊の灯籠もあり今猶民間信仰の火が続けられているものもある。大般若経の写経として一字一石が埋められてその上に宝塔が建られているものもある。

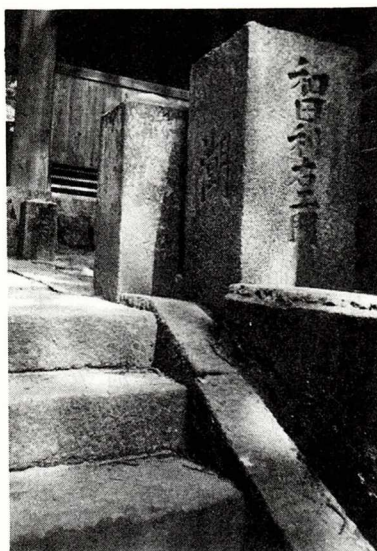
とくに福川の嶽山の鳥居などは山の中腹までこの巨大な石材を運び上げるのはかなりの費用がかかったと思われる。結局、文政二年(一八一九)から文久二年(一八六二)



新南陽市福川嶽山 鳥居

まで四四年間に亘って延々と寄進し続けたことになるが、悔い改められた罪ほど美しいものはないとも言われるけれど利右衛門の執念にも似た思いが偲ばれてならない。刻字にしても下松の周慶寺の石段の分は「徳山・和田盛房」と簡略化しているが、その外はいずれも「和田利右衛門平盛房」と深々と丁寧に刻んでいる。

武の神としての遠石八幡宮・上野八幡宮・山崎八幡宮・若宮八幡宮や文の神としての若宮天神・福田寺前の崎天満宮・防府天満宮・高森天神等に寄進していることは、本人自身の八幡宮・天満宮への信仰の深かったことがうかが



徳山市上野八幡宮 水船
(手を清める石鉢)

われるのみでなく、徳山地方でもその様な信仰が盛であったとも思われる。



防府市阿弥陀寺 宝塔

また時代的に見て最も多く寄進しているのは、嘉永・安政年代が一三個所、文久年代が八個所となっており、その年代の毛利藩の重要事件を挙げてみよう。

(山口県文化史年表)

嘉永元年・海防の部署を定む。(敬親事蹟)

- ・幕府神田岬に砲台増築を許可。
- ・小野為八・西洋砲術を修得し、長崎より帰る。

嘉永三年・沿海防備の兵数を定む（萩史料）

〃 四年・敬親往古よりの忠戦死諸士の霊を洞春寺に供養す。

〃 五年・敬親北浦沿岸を巡視（防長歴史暦）孝女お米死す。

・大暴風雨。

・徳山鳴鳳館を興譲館と改称。

〃 六年・海防部署改定（敬親事蹟）

・兵制を定め水陸先鋒隊・馬廻警衛隊を設く。

・相模国西浦賀より腰越八王子山に至る海岸警備の幕命を受く。

安政二年・鑄砲のため民間の銅器を鑄造局に買上ぐ。

・敬親海防充実の論書を下す。

〃 三年・萩小畑に軍艦製造所を設立。

・丙辰丸（萩藩最初の洋式軍艦）進水式。

〃 五年・長藩兵庫警備の命を奉ず。

・萩上ノ原に反射炉を設く。

〃 六年・西洋銃陣修行として長崎へ派遣。

万延元年・軍艦庚申丸進水す。

文久元年・海軍局を仮りに庚申丸内に設置。

・玖珂郡関戸村において三ポンド野戦砲鑄造。

・萩上津江に火薬製練所設置。

右のように、当時欧米諸国の我が国への接近により国内も、開国が攘夷かと国内・藩内も騒然としていた時代でもあり、国難を鎮護したいという切なる立願もあつたのではないだろうか。

高森から山口までも自ら足を運びながら、石造物献納の心配りも並大抵ではなかったに違いない。

交通状況も不便であつた當時を思い、個人で前非を悔いながら、人のいのちの尊厳観に立ち、生まれ出たことの真の価値に徹して、よくも後半生を四〇数年の長きに亘って懺悔の道を一すじに歩み通した彼の信仰の強烈さに今更ながら驚嘆の外はない。

今後和田利右衛門平盛房の名は数百年は残るかも知れない。いつの代までもいのちの平等に支えられた利右衛門のひたむきのところは語りつがれていてほしいものである。（資料提供いただいた神本正律氏・浴井秀氏・藤井孝純氏・渡辺勝氏へ敬意を表します。若し他に発見された方は御一報下されば幸いです。）

										年代別				
										文政	弘化			
										嘉安	永延			
										万文	久明			
										不	明			
										地区別				
										徳山	山松			
										新南	陽府			
										防高	森口			
										種類別				
										灯籠	15			
										鳥居	4			
										水船	6			
										石段	1			
										玉垣	1			
										宝塔	1			
										柱	1			
										幟立	1			
水船	鳥居	鳥居	水船	石段	灯籠	灯籠	灯籠	灯籠	水船	鳥居	灯籠	宝塔	灯籠	灯籠
同左	柴町一丁目 稻荷社	南野妙見社	上野八幡宮	下松 周慶寺	下松 後野社	下松 浄蓮寺	下松 金毘羅社	宮ノ前 山崎八幡宮	同左	嶽山(平野山) 下腹	防府 天満宮	防府 阿弥陀寺	山口 八坂神社	周東町 高森天神
嘉永七年(一八五四)	安政五年(一八五八)	文久二年(一八六二)	文久二年(一八六二)	文久元年(一八六〇)	文久元年(一八六一)	文久元年(一八六一)	——	嘉永六年(一八五三)	——	文久元年(一八六一)	嘉永五年(一八五二)	安政六年(一八五九)	萬延元年(一八六〇)	安政六年(一八五九)
水	奉寄進	奉寄進	潮					奉獻	潮	奉寄進	獻	大般若真読一 字一石宝塔 宝塔施主和田利右衛門平盛房	奉當町各中 獻	奉獻
和田利右衛門平盛房	嘉永七甲寅四月吉日 和田利右衛門平盛房	和田利右衛門平盛房	文久二壬戌五月吉日 和田利右衛門平盛房	徳山 和田盛房 文久元年辛酉十月	徳山和田利右衛門平盛房 文久元年西三月吉日	和田利右衛門平盛房 文久元年西十一月一日		和田利右衛門 嘉永六癸丑五月吉日	和田利右衛門平盛房	和田利右衛門平盛房 文久元年辛酉十一月	和田利右衛門平盛房 嘉永五壬子年二月吉日	徳山家中和田利右衛門平盛房 嘉永五壬子年二月吉日	徳山和田利右衛門平盛房 徳山和田利右衛門平盛房 萬延元年庚申四月吉日 安政六己未九月吉日	和田利右衛門平盛房 和田利右衛門平盛房
1	1	1	1	1	2	2	2	2	1	1	2	1	2	2

研究ノート

種類	鳥居	水船	灯籠	水船	灯籠	灯籠	柱	灯籠	灯籠	灯籠	灯籠	幟立	玉垣	灯籠	灯籠	水船
所在	若宮町 若宮八幡・天満宮	同左	同左	興元寺墓地 杉神社	権現町 熊野神社	浦山観音堂	権現町 自得寺	同左	同左	同左	北山 天王社	福田寺前 的崎天満宮	遠石八幡宮	同左	遠石八幡宮内 新宮・竈神社	同左
年号	文久元年 (一八六一)	—	嘉永五年 (一八五二)	文久元年 (一八六一)	安政二年 (一八五五)	安政六年 (一八五九)	安政三年 (一八五六)	嘉永五年 (一八五二)	安政六年 (一八五九)	安政六年 (一八五九)	文政二年 (一八一九)	—	弘化二年 (一八四九)	嘉永五年 (一八五二)	—	—
銘文	和田利右衛門平盛房 神のます鳥居を入れればこの身より 文久元辛酉年八月吉日 日月の宮と 安らかに すむ	奉 献	嘉永五壬子年 三月吉日 奉 献	文久元酉年 五月吉日	龍蛇御燭 日月麗天 誠意感道 德暉照融	奉 爰	當山代瑞文新添	奉 燈	奉 燈 日限地蔵尊	奉 燈 日限地蔵尊	當山十四世宏覚代新添	—	奉 献	奉 献	—	—
基	1	1	2	1	2	2	1	2	2	2	1	1	1	2	1	1
			和田利右衛門平盛房	和田利右衛門平盛房	和田利右衛門平盛房 安政乙卯 冬十一月	和田利右衛門平盛房 安政六未 九月吉日	維時安政三丙辰七月吉祥日 施主和田利右衛門平盛房	和田利右衛門平盛房 嘉永五壬子九月吉日	和田利右衛門平盛房 安政六己未年三月吉日	和田利右衛門平盛房 和田利右衛門平盛房	和田利右衛門平盛房 安政六己未六月吉日	和田利右衛門平盛房 文政二年丑四月	和田利右衛門平盛房	和田利右衛門平盛房 弘化二己巳五月吉日	和田利右衛門平盛房 嘉永五壬子年六月吉日	和田利右衛門平盛房